

学位論文の要旨 (論文の内容の要旨)  
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

論 文 題 目  
Dissertation title

現代日本語の「受身・可能・自発・尊敬」表現における  
ジャンル間の使用状況の相違に関する研究  
—助動詞「(ラ)レル」を軸に—

広島大学大学院国際協力研究科  
Graduate School for International Development and Cooperation,  
Hiroshima University  
博士課程後期 教育文化専攻  
Doctoral Program Division of Educational Development and  
Cultural and Regional Studies  
学生番号 D143945  
Student ID No.  
氏 名 王 貞 貞  
Name Seal

本論文は、日本語助動詞「れる・られる」(以下、「(ラ)レル」と略す)において、中国語を母語とする日本語学習者の勉強している内容が、母語話者が実際に使っている日本語との間に一定のギャップがあるという問題意識から、現代日本語における助動詞(ラ)レルの全体的な使用状況を解明したものである。そのために本論文では、現代日本語の文字言語と音声言語から「新聞記事」「文学(地の文)」「ブログ」「テレビニュース」「テレビドラマ」「トーク番組」という六つのジャンルを選び、そこから受身・可能・自発・尊敬用法の各表現形式の用例を抽出し、データの集計と分析を行った。

本論文は、7章で構成される。

第1章は序論である。本研究の研究背景、研究目的、研究方法と研究資料、および論文の構成を述べている。

第2章では、助動詞「(ラ)レル」についての先行研究を紹介する。とくに従来議論の多い、分類上の難点ともなっている「受身・可能」および「可能・自発」の重なっている部分に関する先行研究を概観したうえで、本研究で用いる分類基準について述べる。

第3章から第6章までは、受身・可能・自発・敬語の順に、用法ごとに「(ラ)レル」形式を中心に各形式間の比較対照研究を行う。

第3章「受身」では、まず先行研究を紹介したうえで、本論文における受身表現にかかわる各術語の定義を行い、分類基準を定め、受身表現の迷惑性を検討する。そして六つのジャンルから抽出した受身文を資料に考察し、次の点を明らかにする。①主節と接続節に現れる受身文はほぼ半々である。②直接受身・他動詞による受身が圧倒的に多い。③迷惑性については、中立的な受身が迷惑性をもつ受身より多く用いられている。④主語の有生性からみれば、「新聞記事」と「テレビニュース」は非情物主語が有情物主語よりはるかに多いが、「テレビドラマ」と「トーク番組」はこれと正反対である。「文学(地の文)」と「ブログ」は両者の間に大きな差はなく、中間的な性質がうかがわれる。そして、主語が有情物の場合に非顕在が多く、非情物の場合に顕在が多いという傾向も見られる。また動作主の有生性からみれば、どのジャンルにおいても有情物動作主のほうが圧倒的に多く、しかもそれが文に現れないのが大多数である。⑤「新聞記事」「文学(地の文)」「ブログ」「テレビニュース」では、いずれも「非情物主語顕在・有情物動作主非顕在」型受身が第一位となっている。一方、「テレビドラマ」と「トーク番組」では、「有情物主語・有情物動作主」型受身が8割以上を占めており、主語も動作主も非顕在のほうがはるかに多い。

第4章「可能」では、先行研究を紹介したうえで、(ラ)レル、可能動詞、デキル、ウル・エルという四つの形式を対象に、可能の意味(潜在可能・実現可能)および可能の条件(心情可能・能力可能・内的条件可能・状況可能・属性可能・結果可能・認識の可能)という二つの面から考察を進め、次の点を明らかにする。①殆どのジャンルは可能の意味においても、可能の条件においても、各形式はほぼ同様な傾向を見せている。具体的に(ラ)レル形式に限定すると、②可能の意味の面では、「潜在可能」「非過去テンス」「肯定形」が中心をなしている。③可能の条件の面では、「状況可能」が著

しく多い。④潜在可能と非過去テンス、実現可能と過去テンスの間に相関性が見られる。⑤潜在可能では「非過去+肯定」のパターンが主流となっているが、実現可能では「過去+否定」のパターンが主流となっているジャンルが三つある。

第5章「自発」では、先行研究を紹介したうえで、(ラ)レルと可能動詞という二つの形式を対象に考察を行い、次の点を明らかにする。①主節に現れる自発表現のほうが多数である。②一人称主体のほうが主流であり、それがマーカーを伴って文に出現するものは稀にしかない。③非過去テンスが圧倒的に多い。④構文の面では、典型構文「Yガ(モ) V-(r)areru」のほか、判断型自発に多用される「Yト V-(r)areru」構文もたくさん使われている。動詞によって、慣用の構文に偏りがみられる。⑤自発の型の面では、判断型の自発が主流である。そしてその根拠提示の仕方は、根拠提示のタイプⅡが優位をとっている。⑥「肯定・否定」の面では、(ラ)レル形式がすべて肯定形であるのに対し、可能動詞形式では否定形も用いられており、しかもそれはすべて動詞「思エル」に限定されている。

第6章「敬語」では、先行研究を紹介したうえで、添加形式の尊敬語(ラ)レル、オ/ゴ〜ニナル、オ/ゴ〜ナサル、〜ナサル、オ/ゴ〜ダ(デス)、オ/ゴ〜クダサル、〜テクダサルおよび添加形式の謙讓語オ/ゴ〜イタダク、〜テイタダクを対象に、敬度や主たる使い方、恩恵的意味の含意などから「低敬度敬語」「高敬度敬語」「依頼敬語」「恩恵敬語」という四つのグループに分け、主に「人間関係」と「場」という二つの面から考察を進めた。そして敬語の特殊性から、普通に言う一人称・二人称・三人称ではなく、菊地康人に倣い「敬語の人称」のⅠ人称・Ⅱ人称・Ⅲ人称を用い、次の点を明らかにする。①敬語の使用には「場」が影響し、「新聞記事」「テレビニュース」「文学(地の文)」の「場」において、敬語の使用はきわめて少なく、形式の種類も非常に限られる。一方、「ブログ」「テレビドラマ」「トーク番組」の「場」は、敬語使用が前三者より大幅に多い。②敬語対象の面では、「新聞記事」「文学(地の文)」「ブログ」ではⅡ人称敬語とⅢ人称敬語がほぼ半々であり、「テレビニュース」ではⅢ人称敬語が主流であるが、「テレビドラマ」と「トーク番組」ではⅡ人称敬語が中核となっている。③今回の資料に出ている「オ/ゴ〜クダサル」形式は、1例以外はすべて命令形の「オ/ゴ〜クダサイ」をとっており、丁寧な依頼表現として使われている。④それを除いた他の諸形式では、「新聞記事」と「テレビニュース」以外のジャンルにおいて、いずれも恩恵敬語の占める割合が第一位となっている。⑤全体的に、(ラ)レル敬語は様々な場面や人間関係に用いられているが、総じて言えば、軽い敬度の敬語がふさわしい場合に使われている。ただ、「テレビニュース」における(ラ)レル形式の皇室敬語は敬度の問題ではなく、ニュース報道の中立性、客観性および簡潔さを求める性格によるところが大きい。

第7章は本論文の結論である。用法をとわず、六つのジャンルの間には相違点よりも、類似点のほうが多い。この点については、類似点はその用法自体の特徴を示しているが、相違点はジャンルの性格によるところが大きいと言ってよい。(ラ)レルの四つの用法の使用率もジャンルをとわず似たような傾向を示しており、大きな差はない。受身の用法はいずれのジャンルにおいても主流をなしており、可能用法の(ラ)レルは受身に次いで二番目に高い使用率を示しているが、受身との間にきわめて大きな差が認められる。尊敬用法の(ラ)レルと自発用法の(ラ)レルは、六つのジャンルにおいて順番が前後することがあるが、使用率からすれば、全体的に尊敬のほうがやや多い。一方、可能・自発・敬語表現のほかの形式を加えてみると、どのジャンルにも用法間の割合に大きな変化が起こる。自発は依然として動詞の制限によって数に目立った違いはないが、可能と敬語は著しく増えている。同じ表現における他の形式の存在が、可能・尊敬の(ラ)レルの使用の少なさにつながり、さらに(ラ)レル形式における用法間の偏りという結果をもたらしていると考えられる。

本研究は助動詞(ラ)レルを中心に、現代日本語における受身・可能・自発・尊敬という四つの表現について、文字言語と音声言語の両面から考察を行った。その結果、助動詞(ラ)レルの使用実態と、(ラ)レル形式を含めた受身・可能・自発・敬語表現の使用実態が明らかになり、その背後に潜んでいる原因も若干判明した。これらの結果は、中国語を母語とする日本語学習者を対象とした日本語教育にとっても参考になりうるものと思われる。

備考 論文の要旨はA4判用紙を使用し、4,000字以内とする。ただし、英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.